つるかわ

社会福祉法人つるかわ学園
つるかわ学園を支える会
〒195-0051
東京都町田市真光寺町
186番地
TEL(042)735-2220
FAX(042)736-6374
HP:tsurukawa-gakuen.com

夜空の光のように 水の流れのように 桜の樹の下で

つるかわ学園　理事長
廣本　肇

昭和三十五年の創設以来長い児童施設の時代を経て平成六年、成人施設の施設整備事業を行い移行しました。平成二十二年十一月十三日に創立五十周年記念祝典を地域の皆さんに支えられてここまで来れたという感謝の気持ちをこめて、ささやかな催しをいたしました。平成六年に植えた桜の木々は見事に成長し、毎年豊かな花を咲かせています。春爛漫の勢いが一年中続くといいのにと思うのですが、桜の咲くこの季節は風雨の変調が厳しく、時には雪が降るのです。そんな時期に咲く桜はけなげにして威厳さえ感じさせてくれるのです。もっと、穏やかな頃を選べばいいのに、それをしないのが滑稽でいて、いとおしいのです。

「年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じからず」

これは中国唐代の詩人、劉廷芝の作品の一節です。毎年花は同じように咲くけれど、花を見上げる人は同じではないという、人の世の無常を表現した詩とされているのです。

人は一年経てば同じではいられません。それでも来年も十年先も同じように穏やかに過ごしたいと願うのです。春爛漫が一年中続くように人生を謳歌し続けたいのですが一年三百六十五日、様々な事があって、私たちは努力してそれを乗り越えていくのです。

私は昭和二十七年に北海道の苫小牧高等学校（現苫小牧東高校）を卒業しました。その学校の校則という理念に「恵・礼・勤労」という言葉がありました。卒業して六十年にもなるというのに、私の人生、妙にこの文字が頭から離れなかったのを不思議に思うのです。

そして、その精神が、今、私の働いている福祉の職場にある理念に繋がっていくのです。

理念は
「地域と共に暮らし
地域と共に生き　ここを
愛の拠点とします」
そして行動指針は
「私たちは情熱と勇気をもって
行動します
私たちは共感ある福祉を提供
します
私たちはあなたと心を
結び合います」

学園本館の玄関にこの言葉を掲げています。

昨年の東日本大震災から一年以上が過ぎました。この未曾有の災害は地震や津波だけではなく、原発という途轍もない人的災害をもたらしたのです。『絆』という言葉が『がんばれ日本』という言葉と共に復旧と復興を願い希望としたのです。

しかし『瓦礫』を前にして、風評も拍車をかけています。一体感、献身的な援助はほんとうに存在するのでしょうか。時の総理が、断じてこれを行わなければ日本の再興はないと決断し陣頭指揮をとり拒む人の足並を揃えればいいのです。一方通行ではない臍帯のように熱い関係で結ばれていなくてはならないのです。

かつて、私は、私たちは、この仕事を始めた頃、日本の福祉は『美談』のはじまりであり、ひとつの聖域扱いをされていた時代があります。奉仕と勤労の精神が呼びかけられ「献身と犠牲」そして愛が押しつけられていました。

「老いて枯れ葉のごとく散る」これもまた美談です。「あなたは偉かった」と言われ「勲章と賞状」をもらうのです。しかし老後は誰も保障してくれないのです。

二十三歳の若者だった私は「福祉の貧困に怒りをもって立ち上がった」とテレビや新聞、雑誌に紹介されました。そんなつもりではなかった私はただ戸惑うばかりでした。しかし、リーダーの森岡永吾と菊地燿一という苫東高校の同級生は、その頃のビートジェネレーションの怒れる若者たちだったと思います。私はオドオドしたただの若者でした。時の流れは問答無用のごとく月月火水木金金と多忙な日常に晒され、来る日も来る日も施設作りに奔走していました。若い体だけが資本の壮絶な青春でした。

今まさに老い、七十八の白髪。ふりかえり五十五年携わった福祉の仕事を赤面の至りのごとく思い出しています。桜咲く樹の下で、福祉という仕事を選んでここに来た若者に小出しに言い残す言葉のひとつとして「これやってナンボ」で福祉するのだったら、いてもらわなくてもいいと爆弾を落としたい。そうなら営利を目的とする企業に行って、どれだけ自分が通用するか試したらいいと思うのです。かつて「施設の社会化」と「施設職員の社会化」がとり沙汰された時がありました。お山の大将的施設職員の傲慢無礼。これからは施設が選ばれる時代になるのですが、加えて言いますと、その施設というところにどんな職員が働いているのかが重要な選択肢のひとつになっていくと思うのです。勉強して欲しいと思います。経験も知識も技術も体験を通して今、働いている、例えば知的障害者の施設だとしたら、そこで必要な経験を踏まえ、その知識を蓄え、触れ添う技術の有効性を身につけてしかるべきなのです。鋳型に嵌めパターンを作るマニュアルだけに頼らず勇気と情熱ある行動をひたすら一途に試していく態度と取り組む姿勢が欲しいのです。それは、とりもなおさず利用者に還元されていくからなのです。

「風の三月と雨の四月が美しい五月を作る」と言ったのは気象予報士の倉嶋厚さんですが、寒さに耐え咲く桜を見ながら好き放題書きましたが、新しく福祉という職場を選んで就職した人たちを歓迎し、ずっとこの仕事をしている人たちも、美しい五月の緑と薫風の中で一味を加えてください。

寮長就任にあたり

東京都町田通勤寮　寮長　岩田雅利

ゴールデンウィーク、被災地支援の大規模なボランティアツアーが各地で組まれたという記事があった。これだけの規模のボランティアが入るのは久しぶりだという。被災地の方々が口をそろえて「復興というにはほど遠い」と語るように、深刻なのはこれからだ。いつの日か被災地の方々自身が「もはや被災地ではない」と言える日がくるまで、私たちは関心を絶やしてはいけない。

衣食住の緊急支援がひと段落し、以前とは被災地のニーズも変化している。雇用のマッチング、安定した収入、数年後の人生設計…生きる目標、生活のモチベーションを育んでいける地域社会にするにはどうしたらよいか。これは被災地だけで解決できる問題ではない。

昨年九月から今年の三月まで、毎月のように通わせていただいた宮城県気仙沼市の障害者生活支援センター。瓦礫は片付き、内陸の市街地においてはだいぶ復興したように見える。しかし、今なお、報道されない混沌が溢れ、支援センターの業務は多忙を極める。それなのに、誤解を恐れずに言えば、そこでの活動はとても充実した日々だった。物事は深刻だし、見通しはつかないし、非効率的なことばかり。心を痛めることも多い活動のなか、対象の障害種別、いや、障害者か健常者かの区別もなく、「人に寄り添う、支える」というシンプルな活動が新鮮だった。私も、これまで同じようなセンター業務をやってきたはずだが、久しぶりに、いや初めて？…あぁ、もともと福祉ってこういうもんだよな、福祉の仕事って楽しいじゃないか…。と、素直に思えた。

ところで、先述した被災地での『雇用のマッチング、安定した収入…』という部分は、そのまま通勤寮の支援に置き換えることもできる。生活と仕事、人が社会で生きていくうえで欠かせない両輪である。その両輪とも一手に支える貴重な施設が通勤寮である。生活のモチベーションを育んでいける通勤寮にするにはどうしたらよいか。仕事さえあれば、お金さえあれば、豊かな生活が約束されるわけではない。本来の福祉の果たすべき仕事とは何か。多様化、合理化が求められる昨今の福祉サービス。混沌とする施策・制度の過渡期に、大切なものを見失わないよう、よく考え、じっくり実践していきたい。

（平成二十四年五月一日就任）

出張理美容の取り組み

つるかわ学園　支援課長　成田女里代

昨年五月より、毎月一回「出張理容室」が開かれています。これは職員の行きつけの理容室の理容師佐藤昌弘さんの提案によって実現しました。佐藤さんは、これまでにもケアセンターや施設で、お年寄りや障害のある方のカットをされたことがあるそうです。

毎月第一か第二の火曜日、朝九時過ぎから午後五時頃までの開店で、料金は一回九百円と格安。当初、お店は一階地域交流談話室でしたが、外の景色があまり見えず、ある程度狭い空間の方が、利用者さんが落ち着いて座っていられることがわかり、この頃は、二階交流室です。落ち着いて座っている事が苦手の方や、急に頭や手を動かしてしまう方もおり、ハサミを使う佐藤さんは、とても気を使われていると思います。

しかし、一年が過ぎようとしている今では、利用者さんの名前はもちろんのこと、一人一人の個性をしっかり把握し、プロの技と軽妙な会話で、信頼できる楽しい理容店になっています。

また、多くの利用者さんは、なかなか自分の好みの髪型を注文することができません。担当の支援スタッフが、その方に合う髪型を直接佐藤さんに伝えたり、絵に描いて伝えたりしてきましたが、今では、「前回同様で」と伝えると、佐藤さんから「前回ちょっと長過ぎてすぐに伸びてしまったから、今回はもう少し切りましょうか」等と提案があったりと、椅子に座れば「お任せ」で大丈夫です。

この理容室を楽しみにされている利用者さんも多く、毎月二十五名前後の利用があり、大盛況です。髪を綺麗にすると、気持ちまでスッキリします。つるかわ学園の利用者さんは毎月の出張理容室で、身も心もスッキリ綺麗になっています。

昨年を振り返り～医務室の取り組みについて

つるかわ学園　医務スタッフ　杉山久美子

つるかわ学園の利用者さんの平均年齢は、比較的他の施設に比べ若い方ですが、利用者の重症化や加齢に伴う急激な退行現象が著しくなっています。治療の為、乳幼児期からの長期内服が全身へ影響し新たな障害の併発や嚥下困難や誤嚥の方も増えています。また、加齢が早い特性からみても、三十歳後半より、男女問わず更年期症状による身体や精神面での変化がみられる様になっています。

状況の変化は、ショートステイ利用者にも同様の変化がみられ、今までの対応では安全確保が困難な場面もあり、マンツーマン対応の方も多くなっております。重度身障者の方や視力障害の方の受け入れも行っていますが、今後も二ーズは増える傾向にあります。

昨年は、大震災があり通常の避難訓練の効果で、スムーズな避難が出来ました。しかし、園庭へ避難し待機時間が長くなると上履きで園庭にいる事に拘り、外履きを取りに戻る方がおり、改めて、変化への適応ができない障害を認識し、外用靴をフロアに確保しました。必要な医療物品の持ち出し等は、通常からの備えがあり問題はありませんでした。

感染症対策として、施設は外部の方の出入りが多く、抵抗力が弱い特性もあり、感染自体を完全に封じ込める事は出来ない事を踏まえなくてはなりません。感染の拡大を最小限にするために、通常から標準予防策を励行し、施設としての感染症マニュアルの見直しや、職員が罹患した時の出勤停止基準を設けました。これらの対応から、昨年度は、園内での感染症の発生はみられませんでした。

ここ数年での学園の様子は様変わりし、つるかわ学園の現状は、動と静、支援と介護の混在した環境になっています。

その中で、支援、調理、医務の連携の下、個別にあった支援を行い、全身の機能低下を防ぎながら健康増進への働きかけを継続していきたいと思います。今後も福祉施設における医療行為問題、入院時の受け入れ病院の確保、職員数の増員への対応障害区分や自立支援医療等の書類作成等事務処理問題も日々増えている現状で、悪戦苦闘の毎日です。

西ケ丘二丁目グループ旅行

つるかわ学園支援スタッフ　輿石　大輔

伊藝一郎さん、岩田靖孝さん　付添鴫原、輿石の四人で箱根方面に出かけました。町田駅からロマンスカーに乗車。伊藝さんは車窓の景色を興味深そうに眺め、岩田さんも「景色がきれいだね」と話していました。昼食は車内でお弁当。箱根湯本からは箱根登山電車、ケーブルカー、ロープウェイと乗り継ぎ、大涌谷までの旅程。伊藝さんはロープウェイを遊園地の観覧車とイメージしたのか、笑顔で鼻歌を唄い楽しみました。大涌谷に着くと、黒たまごを目指して頂上まで。岩田さんは一段一段階段を登り、足場の悪い中を一所懸命に歩きました。帰りの下りを合わせると、五km位になり、学園のベランダ歩行の一か月分の走行距離になります。伊藝さんはスムーズに上へ駆け上がり、疲れた表情も見せずに、頂上に到着。いざ黒たまごを買う段になると、「たまご食べない」と言われ、そういえば、たまごが苦手であったことを思い出し、申し訳ないことをしてしまいました。

大涌谷に別れを告げ、宿泊先のホテルに到着。部屋に入ると、二人とも疲れたのか直ぐに横になりました。入浴は四人でゆっくりと箱根温泉に浸かり、心地よく旅の疲れを癒しました。そして、待ちに待った夕食は、和食に重点においたコースで、食事を大いに満喫、お腹一杯になりました。食後はお茶会。大好きなポテトチップやチョコレート等のお菓子でさらに満腹、別腹も大満足。夜九時には布団の中に入りいつもより早めの就寝。

翌二日目は七時に起床。朝食の時間までテレビを観て過ごし、朝食は和洋食のバイキング。自分の好きな物を取って美味しそうに食べ、お替りを何度もし満足した様子でした。食後は足湯に浸かり、少しのんびりしてからホテルをチェックアウト。往路とは逆コースでロープウェイ、ケーブルカーと乗り継ぎ、彫刻の森の美術館へ。岩田さんは、人と出合う度に「こんにちは」と話しかけテンションが高く、一方伊藝さんは遊園地の話や看護師さんの話ばかりでした。昼食は箱根湯本駅で蕎麦をいただき、帰路のロマンスカーの車中でおやつ。二人とも大いに旅行を満喫しました。

福祉マラソン ～完走を目指して

つるかわ学園支援スタッフ　福島　夏樹

平成二十四年三月十一日、皇居で催された福祉マラソンに参加しました。つるかわ学園から小野崎広樹さん、会田陽子さん、塩田利恵さん、ケアホームドリームから茂垣正子さん、高橋弘行さん。ケアホームのづたから池田壯一郎さんが参加しました。また、町田通勤寮の利用者さんも数名参加しました。皇居周回のマラソンコース五キロの道のりを自分のペースを守り完走を目標とする福祉マラソン。この日の為に、昨年の十一月頃から練習に励んできました。

昨年度の福祉マラソンは三月十三日を予定していましたが、その二日前に起きた東日本大震災の影響により中止となりました。昨年走る事が出来なかった分、皆さん、今年は非常に楽しみにしていました。

桜田門の近くにある日比谷公園で、ボランティアとして利用者さんと一緒に伴走してくださる慶應大学ユースホステルクラブOBの上久保さん、野津田高校の上田さんと待ち合わせました。東日本大震災の日から丁度一年という事もあり、日比谷公園内では様々な行事が催され、参加前の軽食を食べている時も気持ちが勇気づけられる思いでした。その後、上久保さん、上田さんと利用者とで和気あいあいとコミュニケーションを図りながらスタート地点の桜田門へと向かいました。

スタートの合図と共に、練習ではゆっくりのペースで走っていた利用者さんが、本番では猛スピードで脱兎のごとく走って行きました。まるで、昨年走る事が出来なかった分を取り返すかのようでした。

結果は、学園およびケアホームの利用者さんは全員完走する事ができました。町田通勤寮の利用者では五キロ女性部門で第三位に入る大健闘でした。マラソンランナーがよく練習で利用する景色の良い皇居周回コース。笑顔で戻ってきた利用者さんたちを見て、私も笑顔と勇気を頂きました。本当にお疲れ様でした。

第三回　つるかわ学園作品展のご案内

つるかわ学園　支援課長　芹澤政人

六月十七日(日)、第三回つるかわ学園作品展を開催いたします。昨年度は四月に予定していましたが、東北大震災の影響もあり、延期となりました。

まだ、企画の段階ですが、第一回、二回の作品展でも行った『利用者作品に囲まれての喫茶コーナー』や『子どもたちが楽しみにしているトランポリン』などを継続して実施する予定です。

その他、日中活動の各活動班の紹介や作品の展示等、これまでの総括を踏まえながら利用者、地域の皆様にゆっくり楽しんで頂けるような内容にしていきたいと考えています。

社会資源としての施設の情報や機能を、地域社会に積極的に提供ができるように、また地域交流を図れるような『きっかけ』をつくっていければと思います。

是非とも、『第三回つるかわ学園作品展』にお越しください。

2010年作品展の様子

つるかわ学園ホームページ

日常のようす、行事のお知らせ等がご覧になれます

アドレスはこちら!!

HP : tsurukawa-gakuen.com

つるかわ学園を支える会ご案内

「支える会」について

国家的財政困難と世情不安定の中にあって、施設も苦しい状況に置かれています。私達は私達なりに苦しさの中にあっても福祉を支える者として努力を惜しまず頑張っています。今一歩の力の支えをこうした形で求めるのは本当に心苦しいのですが、市民の皆様の小さな善意はやがて大きな力を生む礎となる事をお約束します。

どうか「つるかわ学園」を支える会にご入会し力を添えてくださいますようお願い申しあげます。

会費

「つるかわ学園を支える会」の会費は、一口年額三千円ですが、ひとりで何口か入っていただくことを歓迎、お願いしております。

会員の方々には、毎年三回発行するつるかわ学園の機関誌「つるかわ」をお送りし、学園の様子を続けてご報告するとともに、この人達の幸せを願う者同志としての親交を深めます。

入会方法

入会してくださる方は、振込用紙を学園にご請求下さい。

振替口座番号
〇〇一一〇―七―一九四〇二九
加入者
社会福祉法人　つるかわ学園